

関係人口の定量化、指標化について

1. 背景・問題意識

- ・人口減少・高齢化が進むなか、地域の活力創出には、担い手としての関係人口の増加が不可欠になっている。
- ・しかしながら、関係人口の概念規定自体が曖昧で、定量化する手法は確立されていない。
※関係人口＝「関係人口」とは、移住した「定住人口」でもなく、観光に来た「交流人口」でもない、地域や地域の人々と多様に関わる人々のこと」（総務省）
- ・そこで、既存の統計データやモバイル空間統計を活用し、独自の関係人口及びその関連人口データの指標化を試みる。

2. 関係人口の定量把握

- ・関係人口を2つに分類
 - ① ゆかりのある人たち（縁の関係人口）
 - 狭義一県人会、同窓会人口
 - 施策人口：県外ふるさと納税者、E-県民登録者
 - 広義一県外居住者：住民基本台帳人口－推計人口 or 国調5年前兵庫居住地人口
←これは施策の潜在的顧客層
 - ② 行き来する人たち（足の関係人口）
 - 一時滞在者（二地域居住等）
 - 施策事業定期参加者数：地域再生大作戦事業、楽農生活プログラム参加者数
 - 観光入り込み（宿泊者）数は採用しない
 - ※参考：リンケージ人口（山梨県）＝県人会＋二地域居住者（別荘、クラインガルテン、市民農園、会社・団体宿泊所）＋観光宿泊者 ←縁と足を一本化

[対応案]

- ・縁の関係人口のうち、狭義は実数を把握し、それぞれ足し合わせ、「**関係人口（延べ数）**」として指標化
- ・広義は統計データから算出し、「**潜在的関係人口**」として指標化。但し、算出には、県外に出た人の県内への戻り率（Uターン）を勘案する必要あり
- ・足の関係人口の一時滞在者、宿泊者数を、一度山梨リンケージ人口方式等で試算し、その合計をモバイル空間人口の数値と比較し、対応策を検討

3. モバイル空間人口からの把握

- ・ある時間に、ある場所に滞在する人口＝「滞在人口」、「活動人口」
- ・モバイル空間人口（活動人口）[昼]－昼間人口＝非定住人口（アウェイ人口）
- ・モバイル空間人口（活動人口）[夜]－一定住人口＝非定住人口（アウェイ人口）
- ・非定住人口の内訳＝観光人口＋移動人口（通過）＋その他
→モバイル空間人口のうち、通期・通学人口、観光人口（観光庁定義）は別途把握可能

[対応案]

- ・モバイル空間人口自体を「活動人口」として指標化
- ・モバイル空間人口－昼間人口（定住人口）を出してみても、非定住人口がプラスになっているか確認。プラス分を「都市活力指標」として指標化
- ・非定住人口のうち、観光人口、通過人口を除いたその他人口のうち、定期的に訪問している人口（毎週、週2回以上訪問など）の算出を委託し、「定期訪問者」として指標化

4. 留意点（論点）

- ・縁の関係人口（狭義+広義）と足の関係人口の数字を統合するかどうか。それぞれ別々のものとして指標化し、活用するか。
- ・モバイル空間統計のデータと統計データを比較し、相互に数値の妥当性を検証するもの、両者のデータを統合して指標化しない。それぞれ独立して指標化の方向で検討。

[参考：地域活力（＝地域活動総量）と人口の関係]

これまで 地域活力(A)＝定住人口数×活動人口率×1人あたりの活動量（年）

これから 地域活力(B)＝{定住人口数×活動人口率（up）×1人あたりの活動量（up）}
 ＋{関係人口数（延べ数）×1人あたりの活動量（日）}

⇒「活動人口率」と「1人あたりの活動量」の向上と「関係人口の流入」で、『地域活動総量』の確保へ： $A \leq B$

- ・活動人口率アップ＝社会参加の促進、健康寿命の延伸
- ・1人あたりの活動量アップ＝「一人多役」の社会に、兼業拡大
- ・関係人口の拡大＝開かれた地域づくり、交流型内発的發展

⇒定住人口は減っても、ヒトの接触・交流頻度（frequency）、モノ、カネ、情報の流通・循環速度（velocity）はむしろ高まる社会に

